

「インテグラル・エコロジー」への招き
—ラウダート・シ・ゴールズ（LSGs）に取り組むために—

ラウダート・シ部門担当司教 成井大介司教様

皆さん、こんにちは。今回は横浜教区懇談会という 1 年に一度のとても貴重な機会にお招きいただきまして、心から感謝いたします。ありがとうございます。私、ご紹介いただきました通り、新潟教区の司教をしております。司教団のほうではラウダート・シ部門の責任者しております。その関係で今日、横浜教区の皆様がこのラウダート・シとの関係で、このラウダート・シ・ゴールズに関する取り組みを進めていくにあたって、その土台となるものの考え方であるインテグラル・エコロジーというものについてお話しするようにご依頼いただきました。私個人的に新潟教区のものとして、梅村司教様をはじめ、横浜教区の皆様には大変お世話になっていまして、今日こうして機会をいただけたことをすごく嬉しく思っています。とても楽しみにしています。どうぞよろしくお願いします。

私は 1 時半から 2 時半までの 1 時間の時間をいただいているんですけども、多分皆さん、このお話の後にグループに分かれて分かち合いをされるというふうに聞いておりますが、その分かち合いをより有意義にするのが私の役目だというふうに思っています。私は多分ですね、皆様の期待にあまり沿うようなお話をすることは多分ないと思います。自分がこれが大切だと思っていることと、皆さんの生きている環境でこれが大切、これが分からないということは、多分全く違いますので、質問の時間を作りたいと思います。

私、45 分ぐらいお話をしまして、その後に皆さんからご意見とか質問を、分かち合いをする前に質問をいただけたらいいのかなというふうに思っております。ちなみに、私、今日ここに来るにあたって、一つこういうことが実現できたらいいなという期待を持ってやってきました。その期待とは、今日ここで一緒にインテグラル・エコロジーについて考える皆さんが、ご自分の教会や家庭や学校や仕事の場に戻られて、インテグラル・エコロジーっていうのはこういうものだよと自分の言葉で周りの人に説明できるようになるということ。そのために私は今日お話をしよう、そうなったらいいなというふうに思ってお話をしようと思っています。きっと皆さんもご自分の答えがあると思いますので、それを大切にしながら一緒に考えていきたいと思っています。

では、まず皆さん、今日資料を先ほどいただいて、この分厚い各地区の取り組みのまとめというものをいただいて、なんて素晴らしい教区なんだろうと思いました。素晴らしい取り組みを既にやっておられて、ちょっと新潟教区学ばなければというふうに思っていました。ですので、何て言うんでしょうか、もうこれ（見よそれ）は皆さんお持ちですよ。お読みですか。素晴らしい。なんて素晴らしいんでしょう。もう日本中の教区の皆さんに聞かせてあげたいと思います。本当に先ほど梅村司教様が紹介してくださった通り、日本の司教団としてすごく大切な思い出したのですね。23 年ぶりの司教団文書です。2001 年に『命へのまなざし』という本が出されて、この『見よ、それはきわめてよかった』の前の司教団文書がそれですので、23 年ぶりに出された司教文書です。よっぽど大切なことがなければ出さないんです。司教団が、本当にこれはもう何 10 年

ぶりに、これはもう何とかしなければ、何とかして日本の教会全体として取り組みたいという呼びかけのメッセージなわけです。ですので、本当にその思いを、何とか大切にしようという思いを分かち合いながら、これに取り組んでいけたらいいなというふうに思います。ちなみに、ちょっと飛ばしながらいきますけれども。私ども司教団のラウダート・シ部門というところでは、この本のタイトル、とても気に入ってるんですけども、長い、とても長いので、『見よそれ』と呼んでいます。それで、ここでも『見よそれ』というふうに言いますね。

『見よそれ』という本は、実に便利にできています。まずここからちょっと資料の説明ということで、紹介したいんですけども、この『見よそれ』をめくると目次があるんですけども、その目次はものすごく長いです。ものすごい長い目次ですね。あの小項目ですね。小見出しがすべて目次に載っています。つまりたぶん、これを最初から最後までいっぺんに読む人っていないと思います。自分の、これってどうなんだろうと興味があることを読みたいと思うんですよね。ほとんどの人は。そのためにこの目次はものすごく便利です。細かく載ってますので、それをぜひご活用ください。

次は、中央協議会のウェブサイトにも全文が載っています。つまり無料で読めます。それだけでも司教団がどれほど意気込みがあるかということがよく伝わるんじゃないかと思います。普通だったら、これまでこれが発表されるまでは、司教団から発表される文章は全て有料でした。買わなければいけませんでした。そしてすぐに絶版になって手に入れることができなくなります。でもこれはウェブサイトでそのまま読めます。

ウェブサイトでは、そのページでコントロールキーと F キーを押すと検索窓が出てきて、そこに例えばインテグラル・エコロジーを入れると、この文章に出てくるインテグラル・エコロジーのところを全部マークされるわけです。すごく簡単に便利に使うことができます。そしてそれを教会の勉強会とかのために簡単にコピーアンドペーストできますので、非常に便利です。

さらに、この本は実は 1 冊で完結していません。この本について説明するときによく聞かれることなんですけれども、言いたいことは分かったと。じゃあ具体的に私たちが何をすればいいのか。もうちょっとわかりやすく、はっきりと書いてほしかったという話を必ずお話の中に伺うんですけれども、そういったことは全てラウダート・シ部門のウェブサイト特集ページに載せます。これを読んで、私たちの教会ではこんなことをしましたっていうようなことを部門に寄せていただいて、それを紹介したりとか、便利な情報を載せたりとかっていう形で、具体的な行動については、本ではなくてウェブサイトの方で紹介するという形をとっていますので、そちらもご参照くださればと思います。

ちなみに、これの本文そのものは、カトリック中央協議会の出版案内をクリックして、教団関連文書をクリックすると出てきます。そして、ラウダート・シ部門のウェブサイトは“laudatosi.jp”というところです。ここには、特集というところがありまして、その特集の中に『見よそれ』を有効に活用するための特集ページが組んでありますので、そこをご覧いただけたらというふうに思います。ちなみに中にはこのようなことがありまして、よくある質問とか、日本の教会による社会問題、環境問題の取り組みの経緯とか、

『見よ、それはきわめてよかった』活用例とか、分かち合いですね、この本を使った分かち合いの手引きとか、そういった便利なものが載せられていますので、ご参照いただけたらよりいいかなというふうに思います。では、資料の説明はそれぐらいにいたしまして、ちなみに今日お配りした私の資料ですけれども、今日お話しする、今日紹介する教皇の言葉や、『見よそれ』の箇所の抜き書きですので、何かのヒントになればと思ってお配りいたしました。もしよろしければ、このパワーポイントをあとでお渡ししますので、必要な方はどうぞ。

では、ここからインテグラル・エコロジーについてお話をしていきたいと思います。皆さん、環境問題というものについて取り組む時に、問題ということですから、何かその悪い状態を何とかまともに戻すっていう、悪い問題をやっつけるという、そういうような意識を持つことが多いと思います。例えば温暖化ですよ。それをどうやったらなんとかできるのか、生物多様性、どんどん種が絶滅していつているのをどうやってストップできるのかという、そういう問題への対処ということを一番最初に考えがちなんですけれども、でも私たちがこの環境問題に取り組むとき、ラウダート・シ・ゴールズに取り組むときに、一番最初、必ず一番最初にやるべきことは賛美と感謝ですね。

賛美と感謝。ここから始めることが一番大切です。『ラウダート・シ』の一番最初は、先ほど梅村司教様が紹介してくださったように、「ラウダート・シ、ミ・シニョーレ」という言葉で始まっています。アッシジの聖フランシスコの太陽の賛歌、「わたしの主よ、あなたはたたえられますように」という賛美ですね。賛美から始まっています、『ラウダート・シ』は。この『見よそれ』も、「それはきわめてよかった」という神が創造されたものを讃える言葉で始まっています。

それは偶然ではなくて、この環境問題とか、この世界のすべてのことについて取り組むときに、一番最初にすべきなのは、賛美と感謝だからです。ラウダート・シの 12 では、LS というのはラウダート・シです。LS1 はラウダート・シの 1 項。これはラウダート・シの 12 項。ラウダート・シの 5 項ということです。「世界は、解決すべき問題であるよりは、むしろ歓喜と賛美をもって観想されるべき喜ばしい神秘である」というふうにラウダート・シは言っているんですね。「現実を変容させる人間の能力は、存在するものすべてが神からのたまものであることを心に留めながら、生かされねばなりません。」

(LS5)。人間は、神様が創った世界を壊してしまうだけの能力が与えられています。それは、梅村司教様がおっしゃった通り、自分のものだと、自分が支配して、この世界を支配して、自分の思った通りにしていいんだと思っているからですね。しかし、存在するもの全てが神からの賜物である。

この世界のすべてということは、私たちもです。私たち人間も、自然も、空気も、光も星も、重力とか引力とか、この世界のすべてです。この世界のすべてが神様からの賜物なんです。だからみんなそれを大切にすべきだし、感謝すべきということが一番最初になれば、私たちのラウダート・シ・ゴールズに対する取り組みは、それこそ梅村司教様がおっしゃったように、一般のなんていうんでしょうか、環境への取り組み団体と同じになってしまう。なってしまうっていうのは、別にそれは環境団体のことを卑下し

ているわけではなく、それはそれで素晴らしい活動なんですけれども、私たちの良さを生かしていくためには、本当にこの神の賜物であるすべてに感謝をする、賛美するっていうところから始めないと、カトリック教会の取り組みになっていかないということです。

用語なんですけども、インテグラル・エコロジーについて『ラウダート・シ』と『見よそれ』では、総合的なというところにフリガナをつけてインテグラルというふうになっています。つまり、漢字で総合的なエコロジーというふうに書いてあるのは、インテグラル・エコロジーと読むということです。インテグラルなエコロジーではなくて、インテグラル・エコロジーですね。インテグラル・エコロジーという言葉はあまり耳慣れない言葉ですよ。でも、この言葉が、この概念が『ラウダート・シ』の中心です。

それについて『見よそれ』の 7 項でこういうふうに説明されています。「インテグラル・エコロジーは、いのちの営みと、それを可能とする環境条件を主題とした学びと実践である、エコロジーの一種です。そこでは、神との、他者との、自然との、そして自分自身との、調和ある関係がすべて取り上げられ、しかもこれらのかかわりが相互に分かちがたく結びつき、互いに影響を及ぼし合っているという事実を忘れることはありません。」

解説したいと思います。インテグラルという言葉とエコロジーという言葉、その 2 つあるわけですね。そのエコロジーというものは、こういうエコロジーって一般的によく使いますよね。環境にやさしい行動のことをエコロジーって言ったりすると思いますが、もともとエコロジーという言葉の意味は、ここからいのちの営みとそれを可能とする環境条件を主題とした学びと実践のことです。

皆さん、生命が生きていくため、例えば人の命が生きていくために必要な環境ってどんなものがあると思いますか。(A:水とか空気とか、宇宙に私たちが生きているということがあって。そこにいろんな…) はい、そうですね。ありがとうございます。それが全部つながっていて、この世界のすべてがつながっていて、例えば植物を食べる動物がいて、その動物を食べる動物がいて、人間は両方とも食べるとか、つながっているわけです。人間の排泄物をバクテリアが分解したとか、そういうような確かにつながりがあります。それがなければ、人間の命は生きていけないですね。

他には何かありますか。人の命が豊かに生きていくために、社会とか経済とか必要ですよ。(A:霊) はい、そうですね。神様とのつながりも必要ですよ。

私は余談が多い人で、いつも時間切れ間際ですごく急ぐんですけども、2014 年に西アフリカでエボラ熱というとても恐ろしい感染症が流行ったんです。私ずっと長らくカリタスのために働いていて、エボラ熱に関する国際カリタスの取り組みについて実際に現場で見てきた人、カリタスの職員の人の話を聞く機会がありました。とても印象的だったことを紹介したいんですけども、例えば国境なき医師団とか国際赤十字とかが即席クリニックを作って、医者を派遣して、医療活動をして、栄養のある食べ物を配って、衛生キットを配って、そしてその病人とか遺体の取り扱い方法、どうやったらうつらないでいれるかというような、そういうことを説明して回ったんですね。

カトリック教会ももともとクリニックありますし、教会もありますし、そういう同じよ

うなことをしました。でも、教会が決定的に違うのは、その亡くなった、まあ、バタバタ死んでいくんです。本当に恐ろしいぐらい人が死んでいく、致死率 90%にもなるっていうぐらい、治療が遅れるとバタバタ死んでいくんですね。人が死んでいくと、教会は遺体の取り扱い方を教えるだけじゃなくて、遺体を教会に運んで、村の人と一緒に泣いて、一緒にお祈りして、一緒にお墓に行って埋葬して葬儀ミサをやるっていう、教会ですから、当たり前のことを当然ですけれどもやるわけです。別にエボラじゃなくても、そんなことは当たり前やるわけですね。

人が生きていくために、人として尊厳を保って、十全な生を生きていくために、自分のために泣いてくれる人がいる。自分のために祈ってくれる人がいる。両親が亡くなった子供を、お金がないにもかかわらず、何とか集めて即席の孤児院を教会のホールで作って、子供の面倒を見る人がいる。緊急災害プロジェクトに予算をつけて、それを実行するっていうこととはわけが違う。

人を大切にするっていう、根本から、人を大切にするってことをするわけです。人が生きていくっていうのはそういうことだと思うんです。ものがあれば、つながりがあれば生きていけるんじゃないくて、霊的にも、そしてその尊厳が、人によって大切にされているという経験がなければ、人は十全に生きていけないわけです。そういう意味です。

インテグラルっていうのは、完全だとか全くとか、十全だとか、全体を構成する要素の統合とかいう意味ですね。つまり、生命が健全に十全に生きていくための全ての環境のこと。それを『ラウダート・シ』では、神様との関係、他者との関係、自然との関係、そして自分自身との関係、というわけですけれども、この4つすべてが、その4つのすべての環境が整っているときに、人は十全に人らしく、尊厳をもって生きていくことができるんだっていうのがインテグラル・エコロジーです。

ですので、決して環境問題への取り組みっていうようなことではない。もちろんそれも一部なんですけれども、環境問題に取り組めばそれで OK というようなことではないということがとかお分かりになるかと思います。そのところが一番重要な部分だと思うのです。先ほどおっしゃってくださった通りですね、この地球には生物多様性というものがあって、生態系、例えば林とか森とか川とか池とか湿原とか海とか、そういうような生態系があって、生命が育まれる生態系があるわけですね。そこには様々な種があって、様々な種があるからこそ、この地球はいろいろ循環して回っていくようにできているわけですね。例えばミツバチが花粉をくっつけていろんな花を回って、ようやく花ができていくことができるというような世界になっているわけです。それぞれの種の中にも遺伝子の違いがあって、同じ人間でも一人一人が全く違うという、その全て、生態系も種の遺伝子も違うレベルで大切にされなければいけない。

そして神様との関係ですね。ここで、創世記で神がこの世界を造られた時のことが神話的に語られているわけなんですけれども、いろんなものを造って、「見よ、それは極めて良かった」というふうに言われていますが、一つ一つの造られたもの、例えば光とか闇とか海とか空とか、動物とか魚とか、そういう一つ一つの造られたもの全てが極めて良かったということと、その一つ一つ全部があって、全部が繋がっていて、全てが互いを

必要としていて、お互いに生かされ合っていて、命を与え合っているという、そのつながりが極めてよかったという意味と 2 つの意味です。

そして、ここでもう一つ、創世記絡みで大切にしなければいけないことは、私たち被造物について、例えば 9 月 1 日から 10 月 4 日は、「すべての命を守るための月間」と日本では呼ばれていて、海外では「被造物の季節」というふうに言われています。英語で言うと Season of Creation と言います。Creation と英語で言った時に 2 つの意味があります。一つは被造物、神様が造ったもの。この豊かな自然とかですね。もう一つは神様の創造のわざ。全く違うことですが、それは Creation という言葉で、両方ともの意味を指します。私たちはその両方を大切に、大切にすることを求められています。

最初に、全てのことは賛美と感謝から始まると言いましたけれども、それは神様がこの世を創ったという創造の業に対する賛美と感謝ですよね。大自然の中に立って、深く深呼吸をして、自然の恵みを感じる。それは自然への感謝であると同時に、この自然を造ってくださった神、その創造の業への感謝ということ、その 2 つのレベルがあるんだということを忘れずに言いたいと思います。

何度も繰り返し出てくることですが、インテグラル・エコロジーは、神と他者と自然と自分自身との関係、調和であるというふうに言いますが、私と自分自身の調和って何でしょうね。私と自分自身との調和。ちょっと理解しづらいですね。これは『見よそれ』19 項です。『ラウダート・シ』が指摘する根本課題は「人間性の内的刷新」といえるでしょう。エコロジカルな危機の原因が人間にあると率直に認めたうえで、人間の振る舞いの抜本的な改善が必要であり、そのためには人間性の内側からの刷新が欠かせないのだと指摘します。人間の本来のあり方からの逸脱が環境問題の原因であるならば、その解決には、人間が立ち止まって本来の生き方を確認し、そこへと立ち返らなければならないのです。」

そして、『ラウダート・シ』218 項では、エコロジカルな回心について、こういう風に言っています。「アッシジの聖フランシスコの姿を思い起こすことによってわたしたちは、被造界との健全なかかわりが、全人格に及ぶ回心の一面であることに気づかされます。その回心によって、わたしたちは、過ち、罪、落ち度、失敗に気づき、心からの悔い改めと、変わりたいという強い望みへと導かれます。」「そのような和解に達するために、わたしたちは自分たちの生活を吟味し、行いや怠りによって神のものである被造界を傷つけてきたことを認めなければなりません。わたしたちは、回心、すなわち心の変革を経る必要があるのです。」

自分の生活がこの地球を傷つけ、人を傷つけ、神の心を傷つけているということに気がつかず、ただエコな生活を送ったり、祈りをしたり、人に親切にしたりする。それはそれでいいのかもしれませんが、ちょっと足りないと思うんですね。自分自身が、この神様との関係、周りの人との関係、自然との関係を、自分自身のこととしてしっかりと受け止めて回心してこそ、他の 3 つとの関係も調和されるということですね。そういう意味で、自分自身との調和ということが言われているわけです。ですので、インテグラル・エコロジーというものについて取り組むときに、私自身が回心する、生命のつなが

りの中での回心を行うことが必須だというふうに言われているわけです。

ちょっと時間がなくなってきたので、ラウダート・シ・ゴールズは具体的な取り組みを促すものですね。その具体的な取り組みを促すにあたってのヒントが、この『見よそれ』の 36 項からあります。それはライフスタイルの転換という項目です。具体的な活動をやっていく前に、私たちに何ができるかなと考える前に、この『見よそれ』36 のライフスタイルの転換を読むことをお勧めします。

どんどん進んでいきます。そして、もう一つの大切な点は、これこそまさに梅村司教様がおっしゃってくださった通り、インテグラル・エコロジーへの取り組みは福音の証しだということです。『見よそれ』2 項にはこういうふうに書かれています。「すべてのいのち、すべての被造物は神のたまものです。その意味で、すべてのいのちをはぐくむことは、キリスト者にとって信仰告白であり、福音をあかしすることです。神の国の建設に参加することだということもできるでしょう。」

カトリック教会が環境問題とか社会問題、この世界の様々な問題にどうして取り組まなくてはいけないのか。それは、この世界のすべてが神様からの愛のしるしである賜物であって、それに感謝して、それを大切にし、育むことは、信仰そのものだということですよ。そういうものの考え方から、ラウダート・シ・ゴールズに取り組んでいくということが大切だと思います。

ちなみに、ゴールズという言葉がよく使われますね。SDGS もそうですし、ラウダート・シ・ゴールズもそうですけれども、ゴールって、例えばそのマラソンのゴールみたいな感じで、目的地というようなイメージがあると思います。それを目指して、それが最終目的地だというような思いで取り組むことが多いと思うんですけれども、ラウダート・シ・ゴールズは目的ではありません。ラウダート・シ・ゴールズに書かれていることを実行するのは、それを実行して実現するのが目的ではなくて、インテグラル・エコロジーな生き方をするための道具です。7 つのラウダート・シ・ゴールズは、インテグラル・エコロジーに基づいた生き方を生き、広めていくための道具です。決して目的ではありません。ですから、あまりいい言葉ではない。なぜラウダート・シ・ゴールズというふうになっちゃったのか私わからないんですけれども、決してそれが目的になってはいけないということです。

では、ラウダート・シ・ゴールズに入ってきます。ラウダート・シ・ゴールズは、『ラウダート・シ』の呼びかけを 7 つの点にまとめたものです。それぞれのゴールに、インテグラル・エコロジーの視点、すなわち、神と他者と自然と自分自身との調和という視点から取り組む。大切なことですが、生命が十全に満たされていない状況、もしくは生命が本当に神様から与えられたものとして、ふさわしく、尊厳を持って輝くために何をすればいいかっていうのは、場所や人によって全然違います。

当たり前のことですが、例えば私、新潟教区に住んでいて、新潟教区の中ですら、新潟市内と新潟県の山の方では全く違います。環境問題も人の問題も全然違います。まして横浜教区の皆さんと私の経験では、全く何も同じことはないぐらい、本当に違うと思います。ですので、どうしたらいいですかというものではない。自分がどうしたいか、どうするべきかって考えることです。ですので、この具体的な行動は、それぞれの

環境、それぞれの人生、それぞれの視点で考えてくださいということです。

もう何回も繰り返しますけれども、全てが神様からの賜物なので、それに感謝し、大切にするという思いで取り組む。問題に取り組むことから始めるのではなくて、賛美し、感謝することから始めるということです。具体的な行動例は、さっき言った通りウェブサイトで紹介していきますけれども、この『見よそれ』の 100 番にも少し載っていますので、ご参考くださればと思います。

では、ここから一つ一つの 7 つのラウダート・シ・ゴールズについて少しコメントをしたいと思います。内容については皆さんが既に、こんな立派な報告書をまとめておられて、それぞれ取り組んでおられますので、内容について説明することはないと思いますが、私がそれぞれについて感じることをお話したいと思います。短く。

地球の叫びに答えて、というのが 1 番目の、1 つ目のゴールですけれども、これは非常にわかりやすいですね。ちなみに、2 つの段落からなっているのは、ラウダート・シ・ゴールズ 7 つすべて、1 つ目がその目的、ゴールの内容。2 つ目が具体的な取り組みの提案ということですが、これ世界の人たちに向けられたものなので、日本に合わないこともたくさんありますので、必ずこれをしなくてはいけないというものでは決していない。皆さんの現場にあったやり方で考えてくださればというふうに思います。ここに書かれていることは、すごく、当たり前のことでもありますので、特に説明は必要ないと思うんですけれども、ただ、何が正しいのか分からない。例えば火力発電所が今日本でたくさんあって、CO₂ をバンバン出している。それだったらまだ原発の方がいいんじゃないのという意見がたくさんあります。どっちがいいんですか。私、科学者じゃないから専門家じゃないかは分かりませんが。

それと、最近特に多いのは、田舎の方でメガソーラーがどんどんどんどん作られていて、それが環境を破壊しているのではないかと。ソーラーなんかさっさと止めるべきであるというような意見が強いですね、最近。どうなんだろうというふうに迷うことが結構あると思います。

私が思うに、いろんな難しいことがありますけれども、自分と自分の地域の人たちがどうしたいのかっていうことを決して忘れてはいけないっていうのが大切なポイントだと思います。私一度、リニューアブル・エナジー、再生可能エネルギー、エネルギー、再生可能電源、電力を売る会社の人のお話を聞いたことがあります。質問をしました。メガソーラーとか風力発電がむしろ環境に悪い側面があって、反対活動がありますけれども、どういうふうに考えますかっていうふうに聞いたら、地元の人が作ったものであれば大丈夫でしょうというふうに言っていました。

つまり、地元の人が、自分たちが生きていくために必要な電力を賄うために、どうしてもこれだけ必要だからソーラーパネルを設置しようと作るのと、都会に発電所を作る場所がないし、反対運動があるから田舎に土地を買って都会のための電気を作ろうというのでは全く意味が違う。つまり、自分がそこで生きていくために何を大切にしたいんだろうということ、みんなで一生懸命考えながら作っていく、この地球の叫びに答えていくということがすごく大切なんだろうなというふうに私は思っています。

貧しい人々の叫びに応えて。これも非常に、わかりやすいことですね。そして、たくさんの方の行動例が皆さんのレポートの中にもありましたので、いいと思いますけれども、一つ、今年私たちは聖年を祝っています。ジュビリー・イヤー。その聖年に関連して、この『見よそれ』の 24 項でエコロジカルな債務というものの考え方が紹介されています。聖年ってジュビリー・キャンペーンとか言われますけれども、債務取り消しキャンペーンと重なっていることが多いです。なぜかという、ヨベルの年ですね。旧約聖書のレビ記に書かれているヨベルの年。例えば負債は許され、売っちゃった土地が返ってきて、奴隷になっていた人が解放されという、その負債がなくなるっていうユダヤ教の伝統から出てきたのがこのカトリック教会の聖年なので、債務取り消しキャンペーンというのがその聖年には行われて、今年も行われているんですけれども、そのエコロジカルな債務というのもあります。

エコロジカルな債務っていうのは、先進国が他の国に出て行って、人の国の環境を壊して回って、そして自然資源を先進国に持ってきている。つまり、私たちはお金では後進国に負債を持っているかもしれない、債権者かもしれない、お金を貸してあげているかもしれないけれども、環境の意味では、私たちは後進国の人々に借りがあるんですよ。その借りを返さなくてはいいけませんよ、というのがエコロジカルな債務なんです。今年聖年ですから、ぜひこの債務取消キャンペーン、取消というか、私たちが債務をきちんと返さなきゃというような意識を持つことにつなげていただけたらなというふうに思います。

エコロジカルな経済。これもとてもわかりやすいと思うんですけれども『ラウダート・シ』206 項には、「物を買うということは、つねに道徳的な行為であって単なる経済的行為ではない」というふうに書かれています。自分が物を買うというのは、何かをただ自分のために手に入れるだけではなくて、それが作られている人にお金が渡り、それを作っている人にお金が渡り、その作っているもの、材料を取ってくることに自分が加担するということです。手を貸すということです。

それは当然道徳的でなければいけないわけです。例えば皆さん、パームオイルっていう油があるのをご存知ですね。赤道の辺りでしかアブラヤシというのは育たなくて、そのアブラヤシから取れるのがパームオイルです。インドネシア、マレーシアで約 1,700 万ヘクタール、2014 年のデータですけど 1,700 万ヘクタール。北海道 2 つ分の土地でアブラヤシ農園があります。世界の生産量の 85%ですね。後でお見せしますが。例えばボルネオ島っていうオランウータンがいるようなジャングルの大密林、生物多様性の宝庫と言われているところが、完全にアブラヤシと人間だけの世界になっちゃうんです。で、このパームオイルというものは、ポテトチップとかチョコレートとか石鹸とか、鉄分とか、発電のための燃料とか、バイオディーゼルとかのために使われます。

これは、私が 2017 年にインドネシアに行ったときに撮った写真です。ちょっと見えにくいかもしれませんが、セスナ機に乗って窓から撮った写真です。ここからこっちが自然のジャングル、ここからこっちがアブラヤシ農園。地平線まで、境目がわかり

やすくなるために、こういうふうに境目のところを撮りましたけれども、こっちは、こっちもこっちもセスナ機から見て地平線までアブラヤシ農園です。こうやってジャングルを全部切り倒して、その茶色いねずみ色のやつが切り倒された木、その木を再利用するならまだしも、ガンガン燃やしたりして、とんでもない空気が汚染されたりします。こうやってアブラヤシの苗をバンバン育てて、アブラヤシ農園を作っていくんですけども。これインドネシア語で、「ここで水浴びするな」と書いてあるんですけども、このアブラヤシ農園の中のため池ですね。農薬だらけで体に悪いからです。この人たちはもう井戸水も飲めなくなって、雨の水だけに頼って生活するようになりました。先住民の土地。さっきも言いましたが、恐ろしく広いところがそれまで本当にものすごいたくさんの命、さまざまな種、さまざまな遺伝子が生きていたところがアブラヤシと人間だけの世界なんです。環境破壊、生物多様性が壊されているわけですね。それが私たちのポテトチップや口紅になるわけです。2019 年に EU はパームオイルを車の中のバイオ燃料として使うことを禁止しました。私たちバチカンも一緒になって散々アドボカシー活動をやったんですね。いろんな NGO と一緒に、私は以前そういう仕事をしていました。ヨーロッパのスーパーでは、この製品にはパームオイルを使っていませんと書いてある商品が普通にコンビニみたいなスーパーに並んでいます。日清カップヌードルの普通サイズのやつは 2020 年から RSPO 認定という、いわゆる持続可能なパームオイルアブラヤシ農園という認証があるんですけども、それを使っています。左側がヨーロッパで普通に売ってるクッキーですけども、「SENZA Olio di Palma」と書いてあります。「パームオイル使ってませんよ」というふうに書いてあります。こういうふうに書いてあることで、これを選ぶんです、みんな。つまり買い物が道徳的な行為なわけです。

買い物は生き方なんです。命をどういう風に守っていきたいかということを示す行為なんです。これカップラーメンですね。RSPO 認定のロゴが付いています。という風に、経済活動っていうのは特に日本においては、何が使われているのかということになるべくわかりにくく、植物油とか、のようには書いてあるのは、パームオイルとは書いてないですね。ですから、わかりにくくなってるんですけども、それがわかりやすくなるようにアドボカシーするのも大切だと思いますし、なるべく RSPO ロゴが付いているものを使うのが大切だと私は思っていて、私はシャンプーがいらないので、石鹸はサラヤとかミヨシですね。あそこは RSPO 認定を取っているので使うようにしています。

4 つ目が持続可能なライフスタイルを取り入れて。これ皆さんの報告書にもちょっと書いてあったので長いですが読みたいんですが、『ラウダート・シ』の 211 項にこんなことが書かれています。「たとえば、プラスチックや紙の使用を避けること、水の使用量を減らすこと、ゴミを分別すること、食べられる量だけを調理すること、他の生き物を大切にすること、公共交通機関を利用したりカーシェアリングをしたりすること、植林をすること、不要な電気を消すこと、…こうした例はすべて、人間の中にある最善のものを引き出してくれる、寛大で価値ある創造性を反映しています。正しい理由でなされる

ならば、すぐに使い捨てずに再利用することは、わたしたちに固有の尊厳の発露たる愛の行為となりうるのです。」ただ水を節約する、ただ電気を節約するってことだけじゃなくて、愛の表現なんだというふうに教皇は言ってるんです。

こういう風に続きます。「こうした努力では世界は変えられないだろう、と考えてはなりません。そうした努力は気づかれないこともしばしばですが、目には見えなくても必ず広がるであろう善を呼び出すがゆえに、社会にとって益となります。さらにまた、そうした行いが、わたしたちに自尊心を取り戻させることもあります。また、より充実した人生を送らせ、地上の生活が労苦に値するものと感じさせることもできるのです。」

自分が日々の生活の中でどれだけ節約してエコな生き方をしても世界は変わらないでしょうと思う中で、でも、自分が例えば電気をこまめに消すことを、神の創造の業への賛美と感謝のうちにやる、フードロスを避けることを命への感謝のために行う、一つ一つの小さなことをそういうふうに行えば、私の人生は賛美と感謝になるんですね。これはすごい、これはすごいことです。そういう人がこの世に増えるってことは、この世界が神のお望みになる場所にだんだん変わっていくということです。神の国の建設が進むということです。これは素晴らしいことだと思います。

エコロジカルな教育を。ここでちょっと時間になりましたので。エコロジカルな教育はですね、学校も本当に大切ですけれども、まず家庭からですね、ということが『ラウダート・シ』213 に書かれています。教会共同体も一つの家庭なので、教会という家庭で皆さんもぜひやっていただけたらと思います。

エコロジカルな霊性。皆さん「センス・オブ・ワンダー」という言葉があります。本があります。レイチェル・カーソンという「沈黙の春」という本を書いた人の本です。お孫さんと一緒に森を歩いて、その自然の素晴らしさに感動して歩いてまわるっていう。イエスは自然に神を見出すプロでした。空の鳥を見よ、野に咲く花を見よ、誰も世話しないのに、神が世話してるじゃないかと。私たちがイエスのこの驚きのまなざしですね、自然を見て、人を見て、この世界を見て、神を感じるセンスを養う霊性が必要だと。最近「被造物を大切にするためのミサ」というのが、式文が発表されましたので、ぜひ各教会でそれをやっていただくといいかと思っています。

この辺を飛ばします。お祈りもありますね。この『見よそれ』の後ろは、「すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り」という日本の司教団が作った祈りもありますので、これも大切だと思います。

ワットとばして、地域社会のレジリエンスとエンパワーメント。例えばこれすごく難しいカタカナなんですけれども。困難から立ち上がる力と一緒に協力して力を底上げしていくことをレジリエンスとエンパワーメントと言いますが、地域のつながりっていうのを大切にしましょうということです。そのつながりが人を大切にし、災害から自分たちを守るための防災につながります。ある意味では近所の人に笑顔で挨拶することも、こういうようなことにつながっていくことだと思います。教会としては、近所のために祈ること、自分たちのためだけではなくて、近所の人のために祈ることも、そういうことだと思いました。

最後の 2 つのスライドですけれども、「わたしたちは、後続する世代の人々に、今成長しつつある子どもたちに、どのような世界を残そうとするのでしょうか。」ということが『ラウダート・シ』160 に書いてありまして、これは教皇フランシスコが私たちに突きつけているとても大切なメッセージ、遺言のようなものだというふうに私は思っています。皆さん、子どもたちですね。私たち大人は次の世代に対して責任があります。次の世代の人たちが、ほんとに命が生き生きと生きることができるような環境を残すという意味でも責任がありますし、同時に私たちの子どもたちが、神様からの賜物であるこの世界を大切にするような大人になるように教育するという意味でも責任があります。

これ、ものすごく大切なことです。さっきのジャングルに行った時、私、先住民の村を訪ねました。自分たちの土地が取り上げられて、アブラヤシ農園になって大変だと。自分たちの生活が変わってしまったと。でもそれは何とかする。戦って、政府と戦って、会社と戦って、何とか土地を取り戻す。それはいいんだと。

でも、どうにもできないことがある。それは、自分の子どもたちがスマホに夢中で、もう森での生活を大切にしなくなっちゃったんだ。どうしたらいいかわかんない。先住民ですよ。森に入って、鹿を弓で捕って生きている先住民。何 100 年もそうやって生きてきた先住民のお父さんお母さんが、酋長さんがそういうふうに言うんです。

日本みたいなところに生きていて、小さい時から、赤ん坊の時からタブレットで YOUTUBE を見て育つ子どもたちが、いかにして命を守っていく、神様からの賜物を守っていくように、成長していくように教育できるかっていうのは、私たち大人の責任です。それをみんなでやっていきましょうということですね。

環境問題について、インテグラル・エコロジーについて、私たちすべてがつながっていると言いながら、他人ごとというふうに思いがちなんですけど、まるで、ボートの後ろの方に穴が開いて、後ろの方に座っている人たちは頑張って水をかき出そうとするわけですけれども、世界のほとんどの人たちは、この帆先にいて私たちの方に穴が開いていなくてよかったと言ってるわけですよ、一緒に沈むのにもかかわらず。

そうではなくて、ともに自分ごととして一緒に歩いていきたいと思います。それではちょっと 5 分オーバーしてしまいましたけれども、とりあえずこれで私の話を終わりにして、皆さんからのご意見、ご質問とか承りたいと思います。ちなみにラウダート・シ部門は、横浜教区の鈴木和枝先生が委員になってくださっていますので、とても感謝しています。ありがとうございます。

<質疑応答>

Q1 信徒：ゴールズに向けての、正しいことっていうか、正しい方向の話がずらっとあると思うんですね。でも現実プラグマティックに考えると、現実はその中にも矛盾があって、そっちをやったらこっちがダメになる。例えば使い捨てるものの、使い捨てるを今止めたらもっとひどいことになる、使い捨てるを残さないといけないと思う部分があって、

正しい方向に対して正しいやり方ってというのがあって、両方ないところからここへ飛ばないわけですね。そこのところを正しいやり方を担保するためにこそ、先ほどの地元の人がそのように、そういう進め方がそのことを担保してるんじゃないかなと思いますが、どうでしょうか。

BP 成井：ありがとうございます。本当におっしゃること、すごくよくわかります。例えばですね、コロナの時にその使い捨てのものを使わなかったら、とんでもないことになっていたと思うんですよね。例えばマスクとか手袋とか、バンバン使い捨てのものを使ってバンバン捨ててきましたけれども、必要な時には使い捨てなくちゃいけないというのは当然のことだと思います。なぜかという、いのちが十全に生きるためにやっていることだからですね。もし使い捨てをやめることで命がダメになるのであれば、やっぱりおかしいわけですね。ですので、そのなんていうんでしょうか、地元の人たちの視点というのをもたしかに大切なんですけれども、地元の人とその隣の人の利権が対立することもありますので、やっぱり賜物なんだという、私たちがいただいているのは神様からいただいたものなんだという意識を持った上で取り組まないと、みんなが取り組まないとダメだと私は思います。今、私たちファースト、あなたファーストじゃないよというような意見が世界中で様々で出てますけれども、そういうことを言い出したらケンカになって、戦争になって、そしてお互いの間に溝ができてというふうになって、どんどんなっているじゃないですか。そうじゃなくて、私たちの上のかたを中心にしてものを見ないと、賜物なんだというふうに物を見ないと進まないというふうに思っているところでございます。

Q2 信徒：素晴らしいお話、どうもありがとうございました。根本課題が「人間性の内的刷新」というところ。まさにその通りで、本当にその実に根本を指摘した言葉だと思っているんですが、一方で、このラウダート・シ・ゴールズに無関心な人、あるいはある意味逆に反対の立場の人に、どういうふうにこれを広めていったらいいのかなというふうに思っているんです。国連の SDGs は、いろいろ問題はあるにしても、パリ協定で目標を設定したりとか、ある意味半ば強引に、それこそゴールズを作って従わせようとする人とかもいるわけですね。力がかなり作用してるものなんです、ラウダート・シ・ゴールズに無関心な人、あるいは反対する方々に広げていくには、どういうふうに我々が行動していけばいいかなと思っているので、もしアドバイスあればいただければと思います。

BP 成井：ありがとうございます。SDGs も同じなんですけれども、ゴールを実現しようっていうふうに持っていくと、それは違うということになりがちですね。私はカトリック系の NGO でずっと働いていて、SDGs を作っているんです、2013 年とか 2012 年とか。そういう時に国連でロビー活動をする。SDGs の文面を本当に世界で困難を極めた生き方をしている人たちの現実にもぐりこんで、そういうようなゴールズにするためのロビー活動をしていたんです。ですので、この SDGs をつくっているときに私はかかわっているんですけれども、SDGs というのもゴールを実現するためにあるんじゃなくて、自分が大切にしたい人の命を守るために使うための道具ですね。それをなるべく理解が共通になるよう

なところに落とし込んでいくというように、道具としてとにかく考えるのも大切だと思います。その道具に同意できない、そんなの違うじゃないかと、そんなの関係ないよという人にどうやってアプローチしていけばいいのかというと、私が一つとても大切だと思っているのは、この一つ前にお見せした子どもたち、次の世代を中心に考えることです。例えば、なん年だったか、2016 年か 7 年、アイルランドに 9 月に行ったんですけれども、グレタさんというスウェーデンの環境少女ですね。彼女が始めた金曜日のボイコットが世界中に広まって 9 月に環境デモをみんなやろうぜっていう運動が始まったんですね。それがすごく流行った時に、私、アイルランドに行ってある町にいたんですけれども、金曜日に全ての学校が休みで、お父さんやお母さんや学校の先生や教会の神父さんたちと一緒に、幼稚園や小学校、高校の子どもたちが仮装して、プラカード、環境のプラカードを持って、町を楽しくお祭りのように練り歩くという、大きな交差点には、環境に関するカードとか、もしくは真っ白な大きな紙が置いてあって、絵の具、水性絵の具が置いてあって、それで手に持ってさっと手形を貼って、そこに地球を大切にと何か自分のメッセージを書いていくみたいなお祭りですよ。ということを子ども中心にやってみました。そういうことに反対する人はそうそういないと思います。私たちの次の世代を大切にするために一緒に取り組んでいこうっていう姿勢は、多分かなり説得力があると思ってまして、そこを中心にしたらいいいのではないかと自分では思っています。

Q3 教区司祭：『見よ、それは極めて良かった』というのが司教団の肝いりということですが、すけれども、正直言ってどこまでも本気なのかなと疑ってしまう気持ちがあるんですけれども。結局何かそれぞれがやってますアピールとか、やりましたアピールで終わりがねないというふうに思っています。司教団がこういうことを出したのがちょっと唐突にも思えてしまいます。司教さんたちがそういうのを言い出したというのは、何か変わったのかなと思うんですけれども、その動機などですね、どういう立ち位置といいますか、具体的に何をもって、どういうふうに変ったのかということ。

それともう一つ、私は信仰という言葉はちょっとくせ者と思ってまして。じゃあなんで今までは信仰でこういうことをやってこれなかったのか、やってこなかったのか。むしろその信仰という言葉が、こういう動きをする人たちを抑えてきた面もあるんじゃないかというふうにも考えているんですが、そういう話は司教さんたちの中でいかがでしょうか。

BP 成井：ありがとうございます。まず、背景ですけれども、これはラウダート・シ部門のウェブサイトの特集ページ、先ほど紹介したところにその経緯が書かれていますので、詳しくはそちらを見ていただきたいんですけれども。直近の経緯でいきますと、2019 年に教皇フランシスコ神が日本を訪問された時のテーマが、「すべてのいのちを守るため」というものでした。その教皇様からの私たちの教会への呼びかけ、すべてのいのちを守っていこうという呼びかけに対して応えるためにどうしようかというふうにみんなで考えたわけです。それに対して始まったのが、9 月 1 日から 10 月 4 日の「すべてのいのちを守るための月間」です。そういうところから、このラウダート・シを中心とした

命を大切にしていこうという取り組みを、日本の教会としてやっていこうっていうのがまずそこで。もちろん 2001 年の『命へのまなざし』のときから、もしかしたらそれ以前のところからずっと続いているんですけども、直近でいうと 2019 年の教皇来日と、その翌年の「すべてのいのちを守るための月間」の始まり。そういうところに始まって中継されて、じゃあ日本の教会としてインテグラル・エコロジーという風に展開をもてるのか、どういうことをやりたいのか、どういうふうに呼びかけたいのかっていうことをまとめなきゃね、わかりやすく伝えなきゃねということで、これを作ることになったんです。それが背景となっています。

もう一つは、もちろん日本における生命が大切にされない状況というのがどんどん深刻になっていく中で、司教団としてきちんとした方向性を打ち出したいというところも、もちろん教皇とは別にあるわけですね。それとは別に、司教団がどれだけ本気かというのは、私にもちょっとわからないですね。すべての司教さんが「やったるぜ～」と思っているかという、どうでしょうかね。是非、梅村司教さんに聞いてみたいと思います。少なくとも梅村司教様は 1 年に一回の懇談会でテーマにされるぐらいですから、素晴らしいことだと私は尊敬していますし、お恥ずかしいことに新潟教区ではまだこういうことができていません。ですから、どれだけ本気かわかりませんが、でも、みんなやっぱりこれは大切にしなければいけないというふうに思っていることの表れですね。司教団文書というのは、すべての司教の同意、これを私の名前で出すことに同意しますという同意がなければ出すことはできません。17 名の司教様がおられて、16 人が賛成しても一人が反対したら出すことができません。そういうものですので、全ての司教様が本当に大切だというふうに思っておられるということは間違いないというふうに思います。お答えになっているかわかりませんが。